

ユーラシア21研究所
ロシア語オピニオンサイト運営事業

2007年12月報告書

(期間：2007年12月1日～12月31日)

ウェブサイト運営責任者：月出皎司

ウェブサイト運営担当者：吉岡明子

< 1 >

05: 日露関係	
No.05-22	
掲 載 日	2007 年 12 月 10 日
フ ァ イ ル 名	05_20071210_下院選挙結果.doc
執 筆 者	月出 皎司(ロシア語で執筆)
翻 訳 者	—
タイトル(ロシア語)	Устраивают ли результаты выборов в Госдуму кремлевских стратегов?
タイトル(日本語)	下院選挙結果にクレムリンの戦略家たちは満足したか
写 真	—
内 容	<p>概要: 下院選での統一ロシアの勝利はクレムリンにとって必ずしも満足すべきものではないだろう、という突っ込み。</p> <p>大意:</p> <p>奇妙な選挙戦期間が終わって、下院総選挙の投票が行われた。その結果、統一ロシアが 315 議席を獲得し、下院の立法プロセスを単独で支配できる状況となった。共産党と自民党、正義党はそれぞれ 57、40、37 議席だった。この結果を第4下院の構成と比較すると、外見的には、新下院はおおむね旧下院の構成を再現したと見てもよさそうだ。共産党は前より若干議席増、自民党は若干減らしたが、統一ロシアが圧勝したという背景のもとでは、その差は大した意味を持たない。つまり、選挙結果は政権党にとって格別よくも悪くもなかったということになる。だが、このような結果を得るために、クレムリンは選挙戦であの空前の全国的大騒ぎを組織したのだろうか？</p> <p>実際には、クレムリンは大統領プーチンのカリスマと国民の信頼を統一ロシアという党に移植するという目標をこの選挙においていたと見て間違いではないだろう。これはプーチン自身の目標ともなった。場合によってはプーチンが自分と同一化された党のほうに移動する可能性も見ていたであろう。もしそうなれば彼は大統領引退後も現在の人気を維持することが可能になるわけだ。党のほうはプーチンのカリスマを受け取ってロシア政界における「指導的地位」を獲得する期待もあった。そのような政党は代々の大統領を含めて、他のあらゆる権力のセンターが顧慮しなければならない存在になるかも知れない。だからこそ統一ロシア党とプーチンは、単なる大勝利ではなく圧倒的な勝利を必要としていたのではないか。</p> <p>そのような観点から今回の選挙結果をみると、統一ロシアは有権者 1 億 900 万人中 4400 人の票を得た。これは圧倒的かどうか？クレムリンの戦略</p>

	<p>家たちは、たぶん有権者総数の半数以上の票が欲しかったのだろう。だが失敗した。そこで戦略家たちは少し前にプーチンが袖にしたばかりの第二与党のことを思い出したわけである。この党も加えれば、プーチンとその支持勢力は2004年の大統領選挙でプーチンが得た票数とちょうど同じだけの票を得たことになる。ただこの文脈だと、プーチンが統一ロシア党に入党することは不適切になってくる。そしてプーチンを党首としない統一ロシアは、指導的地位をもつ「全ロシア人の党」の地位を得ることはまず出来ないだろう。というわけで、大勝利だが圧倒的な勝利ではなかった今回の勝利を固定化するためには、プーチンもクレムリン戦略家たちも、これからの数週間、かなり頭を絞らなければならないだろう。</p>
著作権者利用承諾書	編集部執筆原稿
URL (1/22 時点)	http://www.eri-21.or.jp/russia/opinion/opinion/20071210.shtml

< 2 >

05: 日露関係	
No.05-23	
掲 載 日	2007 年 12 月 12 日
フ ァ イ ル 名	05_20071212_後継者.doc
執 筆 者	月出 皎司(ロシア語で執筆)
翻 訳 者	—
タイトル(ロシア語)	Назвали преемника без сюрприза, но с некоторым парадоксом В дворцовых интригах в окружении Владимира Путина либералы из Смольного выиграли сторонников машиностроения – Путин вроде бы согласился с ревизией курса
タイトル(日本語)	後継者名指しにサプライズなし、ただパラドクスはあった。 スモーリヌイ派が機械産業支持者に勝利、プーチンは路線変更に同意した。
写 真	—
内 容	<p>概要: プーチンの後継者指名について</p> <p>大意:</p> <p>メドベージェフを次期大統領にすると発表があったが、ロシア人や外国の関心ある人びとにとっても、これはサプライズとは言えなかった。同様に、もしイワノフの名前が発表されたとしても、やはりサプライズではなかったろう。二人ともプーチンと親しく、両人ともかれこれ2年も後継候補の看板を担いできた。その上互いに友情と政治的見解の近さを誓い合っている仲だ。</p> <p>とは言え、ロシアはやはりロシア、パラドクスなしには済まなかった。9月半ばまでクレムリンは、大国ロシアを称揚することから産業の近代化までイワノフの大統領としての適性を大衆に植え付けるためのPRを展開してきた。プーチンの同意、いや希望なしにそのようなことが行われる筈はない。その間メドベージェフは首相どまりの仕事である社会政策をやってきた。にもかかわらず最後の選択はメドベージェフだった。</p> <p>面白いことに11月17日、プーチンは統一ロシア幹部との懇談で、次の下院の最大の仕事は造船、航空機、宇宙などなど、イワノフ管掌の分野を強調した。ところが12月10日、プーチンにメドベージェフ候補を提案しにやってきた人びとは、社会政策に力のある人物だからとして彼を推し、今後4年間の最重要事は生活の質の改善だと言った。言ったのはプーチンの名を取り込んだ政党の党首である。プーチンはこれに対して、驚くほど言葉少なに応じ、推薦に同意する根拠として17年間一緒に密に仕事をしてきたことのみを挙げた。候補者がこれから取り組む仕事に適性をもっている、とすら言</p>

	<p>わなかった。</p> <p>ロシアのメディアが伝えるこうしたわずかな情報から言えることは、この30日たらずの間にロシアは国家発展の重要路線を大きく変えたという事実である。そのことの間接的な証拠は、ロシアの証券市場が後継者を好感したことである。</p> <p>ちなみに、今になって最後の数週間を振り返ってみると、プーチンにたとえ強力なものではないが、タイムリーな影響を与えたとおぼしき出来事を見いだすことができる。いずれもシロビキに関することがらで、全部で4つあった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9-10月に起きたシロビキ間の公然抗争 ・財務次官逮捕事件 ・チェメゾフによる侵略的な企業獲得の動き ・シュワルツマンが語る場所の大量企業強奪事件、その黒幕はシロビキで、受益者はシロビキの家族らだという。 <p>具体的にこれらがプーチンの後継決定にどのような仕組みで最後の瞬間に影響を及ぼしたかは知る術がない。</p> <p>もうひとつ、メドベージェフ後継は、さみしいが理解可能な真実を指し示した。クレムリンの陰謀で勝ったのは、プーチンのペテルブルグ市役所(スモリーヌイ)時代にかかわってきた人たちだったという事実である。異常な時代に共通体験をした人びとである。プーチンの重要人事の大半はこの地理的な範囲と時間の中で行われてきた。だからイワノフよりもメドベージェフというのは、この点ではありきたりの結論とも見えるのである。</p> <p>というわけで、ロシアには民主派、リベラル派の次期大統領が現れることになった。こちらとしてはこれを歓迎するしかない。もっともロシアでは自由とかリベラリズムとかはしばしば大企業と汚職役人の自由を意味するのだが。さはさりながら、我々は次期政権が西側との対話のトーンを和らげることを期待してもよいだろう。ただ、懐疑派は、プーチンがメドベージェフに外交を自由にさせるはずがない、と言っている。</p>
著作権者利用承諾書	編集部執筆原稿
URL(1/22時点)	http://www.eri-21.or.jp/russia/opinion/opinion/20071212.shtml

< 3 >

07: 日露関係	
No.05-24	
掲 載 日	2007 年 12 月 25 日
フ ァ イ ル 名	05_20071225_新年.doc
執 筆 者	月出 皎司(ロシア語で執筆)
翻 訳 者	—
タイトル(ロシア語)	Наступающий Новый Год и старая задача президента России
タイトル(日本語)	新年と大統領の持ち越し課題
写 真	—
内 容	<p>概要: 治安機関汚職の対策こそ新大統領と首相プーチンがなすべき持ち越し課題だ、という。</p> <p>大意:</p> <p>ロシアの去りゆく年は政治の世界で緊張とハプニングが多い年だった。経済が順調な反面で、深刻な社会問題、政治問題が表面化してきた。それらはロシアの今後の発展にとって大きな否定的な意味をもつものだ。</p> <p>11 月末に、シュワルツマンと名乗るビジネスマンのインタビューでわれわれ外国の観測者たちは、顔をしかめたくなるような話を聞かされた。それによると、ロシアでは最近、シロビキの現役や退職者による大規模な企業強奪が増えているという。しかも、その裏の組織者かつ受益者は大統領府や力の官庁の高級官僚、その家族たちなのだという。</p> <p>あるいはこのビジネスマンを名乗る男が大げさに話しているのだろうか、中にはあからさまな嘘も混じっているのではないだろうか？だが、一方で、力の官庁で最高位をしめる人物の一人が、仲間のシロビキに対して、国の利害よりも自分の金儲けを上には置くことは許されない、という非難を口にしたばかりだ。彼の発言を誰も否定しなかったし、中傷のかどで咎められることもなかった。また尊敬すべき雑誌である「エキスパート」誌の 41 号は、シロビキによる大規模な商品強奪作戦の例を知らせた。(もっともこの特定のケースでは実行者らは検挙されたようだが。)シュワルツマン氏はその後「モスクワのこだま」の生放送に出演し、発言のニュアンスを修正しようと試みたが、具体的な発言内容は否定しなかった。また、汚職(企業強奪は汚職の最高かつ特殊な形態だ)対策のための国家機関設置が意図されたが、予定に反してプーチン大統領の任期中には準備すら進まなかったという事実もある。国家最高の治安維持機関である最高検察庁と予審委員会の対立もこの汚職激化の背景と関連があるのではないだろうか。</p> <p>しかもロシア経済界の中には特殊国家法人の設立とその攻撃性に大きな</p>

	<p>懸念を抱いているようだ。この特殊法人もシュワルツマン氏の話の中に出てくる。すでに引用したエキスペルト誌の社説が「奇妙の国有かつ国家外企業」について書き、上からの政治的影響が強まることへの中産階級の抵抗の呼びかけをしているのは、このような状況を物語っているのではないだろうか。</p> <p>さらに言えば、このような状況がプーチン氏の首相就任決定に何らかの影響を及ぼしたことは考えられないか。というのも、プーチン氏は10月段階では繰り返し、しかも国際舞台で、プーチン氏に悪意をもつ外国の一部の人々がプーチンの権力欲の証明だとして予言していたこの種の行動について、自分は決してやらないと明言していたのである。たしかに首相にはならないと具体的に言ったわけではなかったが、彼が用いた言語はまさにそのような否定として受け取られたし、それがプーチン氏の意図だったと見受けられた。あるいはその後の状況がより穏やかな形で国のために働くという彼の計画をだめにしたのかもしれない。</p> <p>というわけで、新首相プーチンは若い大統領とのタンデムで、ロシアの完全な民主化や力の官庁の活動の透明性確保は無理としても、せめてこれらの強い影響力をもつシロビキ先生たちにたがを嵌めること位はしてくれると期待してもいいだろうか……。この課題はプーチン大統領のもとで解決できなかった持ち越し課題だが、二人の法律家が力を合わせれば何とかなるかも知れないではないか。</p>
著作権者利用承諾書	編集部執筆原稿
URL (1/22 時点)	http://www.eri-21.or.jp/russia/opinion/opinion/20071225.shtml

< 4 >

07: 日露関係	
No.05-25	
掲 載 日	2007 年 12 月 26 日
フ ァ イ ル 名	05_20071226_袴田先生.doc
執 筆 者	袴田茂樹
翻 訳 者	月出皎司(執筆者露訳確認済み)
タイトル(ロシア語)	Основополагающие вопросы нашего познания России
タイトル(日本語)	ロシア認識の根本問題
写 真	—
内 容	原文あり(添付①)
著作権者利用承諾書	理事執筆原稿
URL(1/22 時点)	http://www.eri-21.or.jp/russia/opinion/opinion/20071226.shtml

< 5 >

06: ビジネスの動き	
No.06-33	
掲 載 日	2007 年 12 月 18 日
フ ァ イ ル 名	06_20071218_産業.doc
執 筆 者	月出皎司
翻 訳 者	—
タイトル(ロシア語)	Путинская политика на фоне китайской промышленной политики К созданию производственной базы Китаю стремятся японские производители материалов
タイトル(日本語)	中国の産業政策を拝啓としたプーチン政策 日本の素材各社は中国に産業基地を作る方向へ
写 真	—
内 容	<p>概要: 素材各社の対中進出についての日経記事をネタに、プーチン政策を軽く批判。</p> <p>大意:</p> <p>12 月 17 日の日経が日本の素材各社の中国進出について報じた。これまで日本の化学、ガラス、鉄鋼メーカーなどは、対中関係では製品輸出に主力を置いていたが、ここへきて次々に現地生産に方針転換しつつある。</p> <p>中国進出が早かった化学会社は帝人化成で、2005 年にポリカ工場を立ち上げている。三菱化学は 2007 年に合繊原料工場を立ち上げ、来年にはポリカ樹脂工場を立ち上げる。三井化学は上海に PC 原料のフェノール工場を建設、12 年に稼働予定。三菱ガス化学はポリカーボネート工場を上海に建設する。2010 年稼働予定の当初能力 8 万トンだが、製品は中国の自動車産業と電子産業に使われる。20 万トンまでの増産計画ももっている。</p> <p>鉄鋼大手の新日本製鐵と JFE はそれぞれ自動車用表明処理後半の工場をすでに立ち上げている。旭硝子は省エネ効果の高い金属膜つき住宅用高級ガラスの生産を始める。王子製紙高級印刷紙工場を建設する。</p> <p>実は中国についてではなく、ロシアについて話したい。</p> <p>両国は BRICS で括られることが多いが、製造業を見る限り類似点よりも相違点のほうがずっと多い。中国は民生品の単純組立事業から始めて短期間に現地調達度を高めた本格生産に、さらに関連部品、部品素材、そしてマザーマシンの製造へと進んできている。</p> <p>ロシアは対照的だ。いまだに製品や部材の輸出が主流であり、しかも民族系メーカーは外国製品の進出に耐えられず衰退。中国は外資進出と民</p>

	<p>族系の強化が並行して進んできた。</p> <p>また、中国の産業政策は民生品重視。つまり国外国内でもっとも需要の大きい製品分野を狙った。国防生産は民生技術進歩の成果をすくい取る形だ。</p> <p>ロシアの産業政策は、国家的観点にたった製造業振興よりも、権力に密着した諸勢力の新たなビジネス抗争を生み出す結果のほうが目立っている。これがまさに2期にわたるプーチン政権の経済政策が生みだした結果なのだ。最近大騒ぎしている「プーチン計画」なるものがこれとどう異なるのかは見えてきていない。</p>
著作権者利用承諾書	編集部執筆原稿
URL (1/22 時点)	http://www.eri-21.or.jp/russia/opinion/business/20071218.shtml

ロシア認識の根本問題

特定非営利活動法人ユーラシア 21 研究所理事

青山学院大学国際政経学部教授

袴田 茂樹

今のロシアの最も深刻な問題あるいは緊要な課題は、ソ連邦崩壊後のロシアの国家としてのアイデンティティの確立の問題であろう。この問題がロシアで特に深刻な理由は2つある。

第1に、ロシア社会が歴史的、自然的、社会心理的その他の原因で、自律的な社会秩序、安定した国家規律の確立しにくい社会であるということである。別の言葉でいえば、市民社会が成熟していないということであり、筆者の表現を使うと、「砂社会」ということでもある。

第2に、自律的な秩序のない砂社会でありながら、市民社会的な秩序と民主主義体制が成立している先進国の体面を保とうとしていることである。つまり共産主義体制、権威主義体制、独裁体制、宗教国家など、砂社会に秩序をもたらすかもしれない諸制度は、先進国の体面上否定していることだ。

王権神授説の絶対王政、皇帝中国の専制体制、江戸の封建体制、帝政時代のロシアなど前近代の国は人権、民主主義、自由という理念にはまったく束縛されなかったし、それで非難を受けることもなかった。近現代でも共産主義のソ連や中国は「プロレタリア独裁」「ブルジョア民主主義批判」を掲げたし、ホメインのイラン、ピノチェトのチリ、カストロのキューバ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの多くの途上国も、宗教国家、独裁主義、権威主義国家としての「居直り」の姿勢を貫いたし、あるいはいまもその状態にある。しかし、一党独裁のソ連体制崩壊後のロシアにおいては、民主主義国あるいはG8の一員として人権、民主主義、自由など「普遍的価値」を受け入れた先進民主主義国の一員のポーズを貫かざるを得ない。

しかし、ロシア人にとっての最大かつもっとも深刻な問題は、アナーキーでアモルフな社会、すなわち「砂社会」にいかにも秩序を確立するかという問題である。ゴルバチョフ時代からエリツィン時代、つまり1980年代末から1990年代のロシアは、一方では民主化、市場化への希望も燃え上がったが、大部分のロシア国民にとってこの時代の最も強烈な印象は、国家の崩壊と無秩序という恐怖の体験であった。したがって民主化とカリベラリズムという言葉は、多くのロシアの庶民にとって無秩序とカオス、貧困を意味する言葉でもある。

ゴルバチョフやエリツィンの支持率が数%にまで下がったのも、今日でもロシアで両者の評価が極端に低いのもこのことと無関係ではない。

本報告の資料にも紹介しているように、V・プーチンは、1990年代以後のロシアにとって最も大きな、また現実的な脅威は、経済破綻でも犯罪、汚職、飲酒、麻薬などの社会問題の拡大でもなく、国家の崩壊であった、と述べている。国家が崩壊し、社会の混乱がますますひどくなったこと、この恐怖の経験は、現代のロシア人にとって「国民的原体験」といってもよいほどの強烈な体験である。これはロシア国民にとって「大祖国戦争（第2次世界大戦）」以来の強烈な国民的原体験である。

無秩序や不安定への恐怖、ロシア人のこの心理を観念的にではなく実感的にわかるか否かが、ロシア理解の鍵である。今日のロシアのプーチンへの支持率は、大統領の任期を2期終えようという現在でも、7割以上という状況にある。これはロシア社会が安定し先進国に近づいていることを示しているのではない。むしろ、この数字はロシア人の無秩序や不安定への本能的とも言える恐怖心を示すものである。あるいは、これはロシア人の「強い指導者」を求める心理の表れでもある。つまり、プーチン大統領へのこの支持率の高さは、決してロシア社会の安定性を示すものではなく、実際はその逆で、ロシア社会の不安定性を示すものなのだ。

このことは、欧米や日本など、歴史的に比較的安定した市民社会が形成されている国において、最高指導者の任期8年目で、支持率が7、8割という高さは通常考えられないということを考えてもわかるだろう。先進民主主義国において、支持率はしばしば大きく落ち込むが、しかしそのことは必ずしも社会の不安定性を示すものではない。むしろ、社会が安定しているからこそ、人々は安心して指導者や与党を批判するし、その結果最高指導者の支持率は任期が数年も経てばしばしば20%、30%台に落ちる。これはむしろ、社会が安定している、あるいは民主主義制度が正常に機能している証拠でもある。

今のロシアにおいては、いかにして「砂社会」を安定させる枠組みとセメントを見出すか、これが最も重要な課題となっているのである。資料に紹介したスルコフ大統領府副長官の「主権民主主義」論も、そのための政治的なメッセージと言えるだろう。「主権民主主義」という観念については、いまロシアでは議論のテーマになっているが、その政治的意図は筆者にいわせれば単純、明快である。つまり「砂社会」を安定させるための処方箋ということだ。スルコフが挙げているロシア政治文化の3つの柱は以下のとおりである。

- ①「中央集権」による政治的全体性の志向
- ②政治目的の「理念化（イデオロギー化）」
- ③政治制度の「人格化（強力な指導者の必要性）」

「砂社会」を安定させるためには、2つの要素が必要である。ひとつは砂に形を与える型枠であり、他のひとつはそれを固めるセメントである。スルコフの主権民主主義論の3要素において、型枠の役割をはたすのが①、③であり、またセメントの役割をはたすのが、②、③である。

セメントの模索において、最近注目されるのは、ソ連時代に忘れ去られていたイワン・イリインの再発見であろう。このスラブ主義的な宗教思想家は、反動的思想家として 1922 年にソ連から追放され、ソ連時代には全く忘れ去られていた。いや、ゴミ捨てに捨てられていた。その宗教思想家をいまのロシアは、ゴミ捨てから拾い上げ、埃を払い汚れを洗い、磨きをかけて神棚に祭っているのだ。イワン・イリインの思想についても、資料をご覧頂きたい。この国粋主義と宗教性への行き過ぎは、民主派だけでなく、ソ連的とも言える国家主義者のプリマコフでさえも批判している。これについても本報告の資料を見ていただきたい。